

先達からのメッセージ

国立大学法人宮城教育大学長 村松 隆

今から30年前、宮城教育大学に情報処理センターが設置される4年前のこと。当時の私は本学でも若手の教員の一人で、単に電算機（大型コンピュータ）を分子モデリングやシミュレーション等の教育研究に活用していたことから、当時の情報処理センター設置準備委員会の委員長から、他の国立大学に設置している情報処理センターの視察を命じられた。数名の教職員と、関東と関西にある教育系大学の情報処理センターを幾つか廻り、センター業務やシステム運用の状況について話を聞いた。マルチタスク、一つの学習プログラムを用いた多人数同時一斉授業、ワープロ・表計算・統計処理等の汎用ソフトウェアの利用、C言語によるプログラミング等、夢のような“情報処理技術”を目の当たりにし、唯々驚くばかりであったことを記憶している。情報処理教育に必要なシステムと技術を本学に導入するには、どのような教育体制を整えておくべきか、教職員と学生に有意なメリットが本当にもたらされるだろうか等、今では笑い話だが、当時としては未知の世界に対する限りない疑心の中で真剣に議論したものである。

さて、本学に情報処理センターが設置され30年を経た今日、情報処理センターは機能が格段に強化され、かつての「コンピュータを計算資源として提供する組織」とは様相が大きく異なったものとなっている。利用者の多目的性を支援し、教育面で言えば主体的な学びが実現できる環境、まさにアクティブラーニング環境が整備されている。当時の夢が教育にしっかり根づいて実現されており、未知の世界に対する限りない疑心は完全に払拭されている。この30年間の本学情報処理センターの進化・革新の歴史は、情報処理センターを支えてきた本学教職員の先端的洞察力と努力のプロセスであり、関係した皆様には敬服する思いである。私の30年間の教育研究プロセスを情報処理センターの歴史と重ね合わせてみても、大勢の人々の顔が走馬灯のように流れ、とても感慨深いものがある。

本学情報処理教育のスタートとも言える1994年に発刊された宮城教育大学情報処理センター年報第1号には、当時の学長をはじめ、センター設立に関わった複数の教職員の情報処理教育への期待が多く述べられている。情報処理センター年報（No.1からNo.16）及び年報の後継である情報処理センター紀要（No.17からNo.25（2017年度））に掲載されている取組・成果は、その時代ごとに相応しい情報処理の開発と実践の軌跡であり、情報処理教育の深化と高度化を目指す著者の強い意気込みが感じられ、本学教職員、学生の未来への夢を読み取ることができる。

グローバル化や情報化など、社会の変化が激しく将来を予測することが難しい時代にあって、子ども一人一人が自らの可能性を最大限に発揮し、よりよい社会の創造と幸福な人生を自ら作り出していくことの重要性が指摘されている。グローバル化が社会に多様性をもたらし、急速な情報化がAIなどの技術革新と同期し、人間生活に大きな質的变化をもたらそうとしている。今後の社会づくりにおいては、膨大な情報から何が重要かを主体的に抽出し、自ら問いを立て、その解決を目指し、他者と協働しながら新たな価値を生み出していくことが求められており、多様な情報関係諸課題への対応に精通した教員の養成の役割は大きい。情報処理センターの益々の発展を期待する。